

しがじん VOL.21 2020.7

SHIGAJIN

全障研滋賀支部発行 TAKE FREE!

特集 コロナ禍の下での「みんなの思い・ねがい」

会員更新・新入会のお願い 新事務局長あいさつ 今年度方針

こんにちは 全障研滋賀支部です !

“しがじん” はみんなのねがいをつなげるために、全国障害者問題研究会（全障研）滋賀支部が発行しています。障害のある人に関わる人たちみんなのつながりをつくり、ひろげていきたいというねがいから生まれました。全障研では、障害者や家族の願いを大切に、すべての人の発達を保障するため研究活動に主体的に参加しています。詳しい活動内容については、次ページの活動方針をご覧ください。

会員更新・新入会のおわかい

全障研の活動は、会員の会費（年会費3000円）に支えられています。会員になっていただくと、全障研新聞などの出版物が届くほか、全障研主催の学習会に無料で参加していただくことができます。

★郵送の場合

「2020年度会費」と書いて120円切手25枚を同封し、

〒520-0052

大津市朝日が丘1-4-39 梅田ビル3階人間発達研究所付 全障研滋賀支部宛

★mailの場合

件名に「全障研入会申込」とご記入の上、

①お名前 ②「しがじん」などの送付先 ③所属など をお知らせください。

会費納入方法は後日相談とします。

詳しくは、下記までお問い合わせください。

sunaba.naga@gmail.com（事務局長 長友志航）



新事務局長あいさつ

この度、滋賀支部の事務局長に就任しました長友志航と申します。私が全障研と出会ったのは6年前のこと。当時、奈良県の大学で院生をしていた私は、指導教員だった越野先生（現、全障研全国委員長）に誘われ…というより、半ば強制的に…奈良支部の事務局員になりました。障害児教育を本格的に学び始めたのが大学院からだったこともあり、右も左もわからない世界。月2回の事務局会議は、話についていくことに必死で自分の考えをもつこともできていませんでした。それでも、会議や学習会を通して障害者問題や発達について学びを深める中で、当時、関わっていた障害のある子どもたちのあらゆる姿の中に、彼らが内に抱えている困り感やねがいというものが少しずつわかるようになってきました。と、同時に、子どもたちのことがより愛おしく感じるようになっていったことを今でも鮮明に覚えています。



修士課程を修了し就職を機に滋賀支部に移ってきて4年目。事務局長交代の話が出たときには正直驚きました。今でも、経験も知識も浅い私に務まるだろうかと不安でいっぱいです。ただ、引き受けた手前、そのようなことばかりも言っていられないので、自分の無知を自覚し、事務局の仲間や会員の皆様にお力をお借りしながら、“人と人とのつながり”を大切にこれまで以上に精進してまいります。なにとぞ、よろしくお願いいたします。

2020年度の活動方針の一部を紹介します。今年もよろしくおねがいします。

1. 事務局のメンバー

| | |
|-------|--|
| 支部長 | 白石 恵理子 |
| 研究部長 | 黒田 吉孝 |
| 全国委員 | 松島 明日香 |
| 事務局長 | 長友 志航 |
| 事務局次長 | 森原 都、上神 宗久 |
| 事務局 | 黒田 恵美子、大師 観世、竹下 光、仁村 菜月子、 栗本 葉子、能勢 ゆかり、別所 尚子、谷 彩香 |
| 協力員 | 浦嶋 真由美、赤星 香早、望月ふみ |

毎月第2・4水曜日 19:00~21:00 人間発達研究所で事務局会議を開いています。
今年度はリモート会議も検討していきます。

2. 研究・学習活動

- *全障研プロジェクトの継続:「滋賀県における重い障害のある人への教育権保障の歴史—重い子を「実践の宝」にする障害児教育—」(能勢・森原・他)のテーマを引き続き検討し、資料を整理します。
 - *今年度の全国大会は中止になりましたが、来年度大会を視野にいれサークル等を基本に計画的にレポート作成に向け取り組みます。
 - *新型コロナウイルス感染拡大防止に関わる緊急事態宣言下での、障害児者やその家族の生活実態、保育現場や学校現場、放課後等デイサービスをはじめとした福祉現場の情勢等の把握に努めます。
 - *教育・福祉・医療等での情勢を広く把握し、事務局等で情報を協議し、会員等に伝えるための有効な方法、例えば、ホームページや「しがじん」等の活用方法を考えます。
- ※今年度の学習会の在り方については、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、ただいま検討中です。
その都度ホームページなどでお知らせします。

3. 支部活動の基盤づくり

①広報活動の充実

- *ホームページ…「全障研滋賀支部」で検索してみてください!
- *「しがじん」…今年度も3回の発行を予定しています。

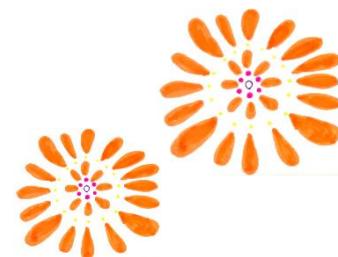
②サークル活動充実に向けた支援

今年度も申請のあったサークル(3人以上で成立)に対して、5000円のサークル援助金を支給し、サークル活動を支援していきます。事務局として活動に参加する、サークル訪問を行うなど、具体的なつながりをつくり出していきます。

③関係組織との連携

次の関係団体・機関と連携を進めます。

わかばの会、障害者の生活と教育を守る滋賀県連絡協議会(「障滋協」)、障害者九条の会、滋賀県障害児学校教職員組合(「滋障教」)、きょうされん滋賀、人間発達研究所、5者協議会、NPO 法人発達保障研究センター、滋賀県民主教育研究所



特集 コロナ禍の下での「みんなの思い・ねがい」

2020年、突如感染が広まった新型コロナウイルス。日本中が不安に包まれる中、突然政府から出された休校要請やそれに続く緊急事態宣言や企業への休業要請。その混乱は今もなお続いています。

私たちは必死にもがき、何とか今を生きています。障害当事者やその保護者、教員や福祉関係者など、様々な方からコロナ禍の今、思うこと、そして願うことをお聞きしました。

「子どもたちの生活と学習の保障を」

保護者

急に休校が決まり生活が一変しました。刺激が少なく疲れないからか、夜間覚醒が増えました。私との関係も悪くなりました。一緒にいる時間が増え干渉されるため、思春期に入ってきた息子は鬱陶しくてたまらなかった様子。私も心身共に疲れて、このままだと虐待してしまうのでは!?と、ちょっと不安になったぐらいでした。

そんな我が家を救ったのは放課後デイの事業所でした。通常より短い時間でしたが、感染予防に配慮しつつ受け入れてくださいました。おかげで息子は生活リズムを大きく崩すことなく体調を維持できました。

学校の対応はというと、我が子の担任は、旧担任も新担任もよく連絡をくださり、「無理な時は学校も利用してください」とおっしゃってくださいました。ですが、担任や養護学校によって利用の基準がちよっと違ったり対応が異なったりしたようです。せめて同じ学校の中では同じ対応をして欲しかったですし、子どもの安全安心を最優先して考えて欲しかったです。学習保障のための夏休み期間の短縮も養護学校間で期間や給食の提供等に違いがあります。正直「これだけ!？」という内容でした。休校で失われた学習の機会を、子どもたちにきちんと保障して欲しいです。



「新型コロナウイルス禍のもとで」

特別支援学校教員

2月末、私が勤めている養護学校では、現場の教師、子どもたち、保護者の声は聞き取られることもなく、3月からの休校が決定事項として下ろされました。管理職からは「配布した文書がすべてです」と説明され、その日から1週間以上、保護者への電話連絡すら許されませんでした。また、学校での子どもの受け入れが可能になった際も、「学校側からは預かれることは伝えない」という説明がされました。休校の間、集まることは制約され、職員会議は開かれず、ただ決まったことがトップダウンで降ろされ続けました。学校が閉められていても放課後デイは開かれている事実。感染予防に努めつつ、どうしたら学校を開けるか。話し合いの場は奪われ、そのような話をしようものなら一部の教師からは「何のための休校だと思っているのか」と、冷やかな目を向けられました。

休校明け、保護者や放課後デイの職員から「この間、学校は何をしていたんだ」と、たくさんの批判的な声をいただいています。休校期間中、何もできなかったもどかしさを感じながら、私はただその声を受け止めることしかできません。保護者と分断され、福祉現場の方々とも分断され、さらには教師同士が分断された今、もう一度、それぞれの立場からの声を発信しあい、「子どもたちのために何ができるか」をみんなで考えていくことが求められているのだと思います。



「コロナと向き合いながら安心して通える学校づくりを」

保護者 小川真奈美

朝「おはよう」と、からだを起こしてやる。その時からだに触れることで、少し熱が高めたとわかる。手足が冷たいのがわかる。体調がわかる。言葉のない子どもたちも、そうやって全身で訴え、私たちは触れて感じ取ります。目の前で声をかけてくれるから、自分に話しかけてくれているのだとわかるのです。だからこそ子どもは一生懸命聞こうとする。私の娘は2メートルも離れたら私に気付いてくれません。コロナ禍で「3密を避けよう！」といわれるようになって改めて「密」の大事さに気づかされました。

突然の「全国一律休校要請」。首相の一言に多くの自治体が右へ倣えしたのは異様ですらありました。最近は何でも“数値で示せ”“エビデンスは？”とか言うくせに、休校にはなんの科学的根拠も示さなかった。学校は休校なのに、学童や放課後等デイサービスは開所という矛盾。福祉現場は金もない人もない消毒液もない中で、自分たちが感染源になったらどうしようという恐怖の中で毎日踏ん張ってくれました。

5月下旬には小児科学会から「休校による流行阻止効果は少ない」「学校に行けない不利益とのバランスを考えてほしい」という報告も出されました。でも多くの子どもが基礎疾患をもつ特別支援学校や福祉施設では、安全策を取らなければならないのは当然です。

今後もしばらくはコロナと付き合いがなくてはなりません。

私たちの出発点は要求と子どもの姿。しっかり対策を取りながら、少しでもできるようにするための条件は何か？不安を可視化し、解決できる手立てはないかを考えよう。

「過密解消というなら、11コースに大型スクールバス1台でなく、小回りの利くマイクロカワゴン車を数台配置してほしい」「養護教員をすぐ増やして！」「先生は毎日の消毒に疲弊している。そのため人の配置を」「障害児学校の先生、子どもたち、福祉施設の職員、利用者に定期的にPCR検査を！」など…、すぐにでも実現させたいことはたくさんあります。しっかり要求して勝ち取っていく、そこまでが全障研の発達保障の実践の中身だと思うのです。



「ある日中支援事業所からの報告」

支援員 おたべ

コロナの影響で私達の事業所の作業内容に大きく影響が出ました。京都名産品の箱折の仕事が、パタリとなくなったのです。そこで「即席のマスクづくり」を始めました。

まず、ミシンは職員、利用者はヒモ通しやアイロンがけ、袋に入れる、閉じると工程に分け仕上げました。日頃の下請けと変わらず丁寧にやりとげ、滞る所には互いに応援しました。なれた手つきです。動揺している職員よりもタフな利用者の姿にほっと胸を撫で下ろしました。その後、家族からも「マスクが欲しい」との声が上がり、2ヶ月足らずで通算80枚近く作り上げました。

(6月中旬)現在も下請け作業は完全復活とはいきません。ただ行政からは利用者の欠席について減算になる分の補填、補償について検討してくれました。

感染のリスクから一時は休所の考えもありました。しかし、長期休暇になると高齢者家族の負担も大きく、加えて作業所の給食が唯一の食事になっている人もあり、極力閉所はしませんでした。また、感染者が出た場合の第二波の事態について、法人全体でどのように立ちむかうのか現在議論しているところです。

今回の事態は明らかに社会の弱者への配慮のなさが突然露呈したように感じます。国や行政に向けて私達自身もこうした災害や危機に備えて「障害者の働く権利や健康に豊かに暮らす権利について」具体的に要望していかなくては、と痛切に感じています。



「コロナ禍の中で・・・障がい者の生活は？」

滋賀肢体障害者の会 片山雅崇

コロナ禍の中で、障がいの有無にかかわらず、人々の生活は、たいへんな状況に。一人暮らしの障がい者の生活も日々、不安と隣り合わせです。私は今、ヘルパーの支援を受けながら一人暮らしをしています。現在、在宅ヘルパーにおいて、利用者も、ヘルパーも、万一、罹患した場合のマニュアルも、保障も何もありません。私の場合、複数のヘルパー事業所を使っているのですが、曜日によって事業所を固定しています。男性ヘルパーが複数いてくださるところは、一人のヘルパーが発熱などで家に来る事が難しくなっても、ほかのヘルパーでフォローしてもらえる可能性があります。男性ヘルパーが一人しかいない事業所は、急に入れなくなった場合、そこから自分で一件、一件、電話やメールで探さなければなりません。それでも、日中であれば、相談支援事業所などの力を借りることはできますが、早朝や夜は、自分で探すほか、すべはありません。

また、ヘルパーは、どうしても密を避けることは、できません。かと言って、健康な状態で、過剰な防護をすると人権にも、かかわってきます。

でも、一番、不安なことは、障がい者や高齢者がコロナウイルスにかかった場合、優先的に入院できる保障がないことです。いくらヘルパーさんが、防護服を着て、フェイスシールドをつけたとしても、病院よりも、感染リスクは高くなってしまいます。障がい者が罹患した場合、軽症であっても、医療機関に入院できる体制がどうしても必要だと思います。



経済的な面でも、かなりの打撃です。前回の緊急事態宣言で、私は、週5日の出勤を週4日にしました。金額にすると、月約16,000円の減収です。今後、再び、緊急事態宣言が出された場合、年金+ α で生活している障がい者やその家族の生活は、たちまち、行き詰ると思います。

「コロナ休校と放課後デイ」

社会福法人わたむきの里福祉会 放課後クラブともだち 児童発達支援管理責任者 盛井智彰

2月28日(木)夕方、全国一斉休校のニュース速報が流れる。翌日、朝一番で管理者とともに役場福祉課へ。国、県からの情報を共有し対応を協議。週明けから、放デイ緊急対応(長期休み期間と同様)として開所することになった。

最初の課題は支援体制の確保。通常、長期休み期間は利用児童が増え、開所時間も8:00~18:30と長時間になる。そのため2カ月前からアルバイトやボランティア等の人材確保に取り掛かるが、今回はそうした準備期間が全く無かった。その為、まずは法人内で別の事業に勤務する職員も含めた応援体制を早急に整えた。同時に養護学校と町内の小中学校に教員派遣を要請。3月24日までの間、延べ152人の先生方に応援を頂き、子ども達の利用を保障すると同時に、保護者の就労を守ることができた。

一方で、感染リスクを避けるために学校も放デイも完全に自粛をした家庭には、電話による支援しか行えなかった。特に要対協ケースでは状況が把握できない期間が2か月以上続いた家庭が複数あり、今後の大きな課題である。

コロナ災害とも言われるように、今回の休校対応は、様々な機関との連携・応援を抜きには乗り越えられなかったし、第2波に対しても更なる協力体制は必須。何より、3か月もの間、教育権を奪われてしまった子ども達と、子ども達を支え続けた保護者の声を、いま関係機関が協力をして拾い上げる事が、次の備えへの第一歩となると思う。



「保育園から」

公立保育園 保育士

私の担任するクラスでは、ようやく見つけた就労先が休業となり収入がなくなったご家庭がありました。登園自粛期間は給食が取りやめとなり、「仕事なくなったし家で子ども見るわ。派遣も登録したけど全然ないし、弁当作るの面倒やし。」と電話口で無気力に話される声を聞き「もっと日常の保育を提供したいのに」と悔しさがこみ上げました。障害を持つお子さんの世帯は就労があり保育することができましたが、感染リスクからお休みされたご家庭もありました。また、近況をうかがう中で「煮詰まってしんどい」という声に触れ、「おたよりなどを渡したいので一度、保育園に来れますか？」とお誘いし、状況を発信してもらい登園を勧めた家庭もありました。報道等で日本人の我慢強さが誇張されたりしますが、私は「しんどさや弱さ、悩みを発信できる力の大切さ」を感じた日々でした。

保育所には、戦後から変わらない子ども一人当たりの面積についての最低基準があります。満2歳以上の子どもですと1.98㎡（約1畳）です。恵まれた環境ではありません。その保育現場で子ども同士の接触を避け感染対策をすることには難しさや違和感があります。子どもに無理難題を強いる対策よりも、安心して、快適に、より丁寧に過ごせるように子どもの育つ環境や基準を見直すことも、今すべき大切な議論だと感じています。



「障害児教育・福祉の歴史に学びながら・・・」

滋賀支部事務局 能勢ゆかり

今年に入って起きた新型コロナウイルスの感染拡大への政府の対応や人びとの反応は、現代社会の問題点を浮き彫りにしています。それは、市場原理主義や自己責任論などが広がった結果だとも言えます。2月末、政府は早々に全校一斉休校を決定し、その後の対応を家族や福祉現場に丸投げしました。命をかけてウイルスと闘う医療従事者への心ない言動は後を絶ちません。緊急事態だからこそ、みんなが力を合わせなければならないのに、それができない体制がすでにつくられてしまっています。

滋賀支部ではここ数年、滋賀県における重い障害のある人への教育権保障の実践と歴史をまとめています。昨年度は、びわこ学園での取り組みを1960年代後半まで遡りまとめました（詳しくは「障害者問題研究」47巻第4号に掲載）。

戦後、医療・教育・福祉に関わって様々な法整備が進みましたが、重い障害のある人たちは、治癒・自立・社会復帰が難しいことを理由にその外側に置かれていました。しかし、びわこ学園の母体である近江学園（1946年）では、学園内に医局と分教室を設置し、福祉、医療、教育を一体として保障する態勢をつくっていました。法的、予算的裏付けがない中での現場の努力は大変なものだったと思いますが、それが障害児教育や福祉の原型をつくり出してきたこともまた事実です。現在では、課題は山積しているとはいえ、各分野はそれぞれに充実しつつあります。一方で、各分野の連携が課題となり、その狭間で多くの問題が起こっています。障害児教育・福祉の歴史に学びながら、これからどんな社会をつくっていく必要があるのか改めて一緒に考えたいと思います。

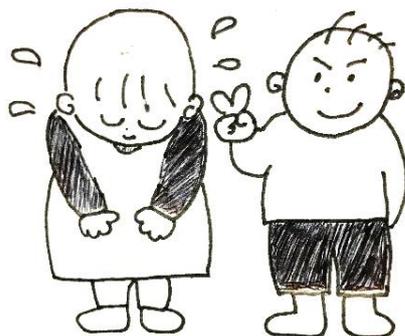


ご協力いただいたみなさん、ありがとうございました。

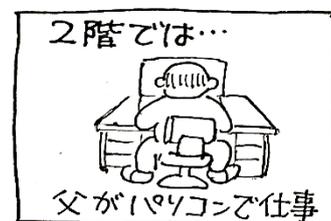
次回の「しがじん」ではコロナ禍の現状や課題について、事務局での討論を掲載する予定です。みなさんの「思い・ねがい」もぜひ届けてください。ご感想もお待ちしています。

PONTAのゆるゆる日記 NO.5

コロナのせいだ...



母 ぽんた(18)



ここにもコロナ禍が...

Pontaは、18歳のダウン症の男の子です。三人きょうだいの末っ子。養護学校を卒業し、この4月からは作業所でお仕事をしています。

最近の口癖は「コロナ、早く飛んで行ってほしい」。張り切って通っていた作業所も、お休みになったり時短になったりとなかなか落ち着きません。

皆さんもお身体（と、コロナ太り）にはお気をつけて...!

・・・全障研滋賀支部よりお知らせ・・・

◎「一歳半の節」学習会について

6月に実施予定でしたが延期となりました。10月に実施する予定です。詳細についてはHPでお知らせしますのでご覧ください。

◎今後の学習会について

冬に、「重い障害のある人たち」に焦点を当てた学習会を実施する予定です。こちらについても詳細はまた後日、チラシやHPにてお知らせします。

◎今年度の「しがじん」について

今年も編集担当は仁村です(^O^)さっそく表紙をリニューアルしてみましたがいかがでしょうか。今年もみなさんからのご意見ご感想をお待ちしています!

